

<主要株価指数>

	終値	前日比
日経平均株価	14791.99	-35.84
N Y ダウ	16,457.66	134.60
D A X (独)	9,555.91	-31.28
FTSE100 (英)	6,598.37	-17.21
CAC40 (仏)	4,391.50	-19.76

<外国為替>※

ドル円	103.23 円	0.00 円
ユーロドル	1.3776 ドル	0.00 ドル

<長期金利>※

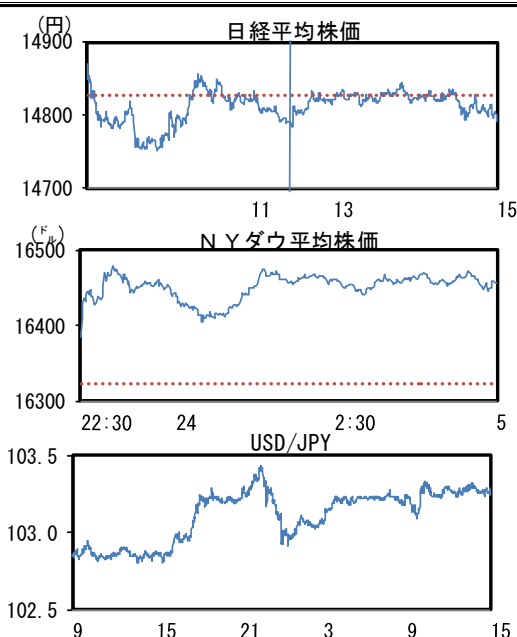
日本	0.620 %	-0.02 %
米国	2.718 %	-0.00 %
英国	2.736 %	0.01 %
ドイツ	1.566 %	0.02 %
フランス	2.084 %	0.02 %
イタリア	3.292 %	-0.01 %
スペイン	3.230 %	-0.01 %

<商品>

N Y 原油	101.58 ドル	-0.09 ドル
N Y 金	1283.40 ドル	-10.40 ドル

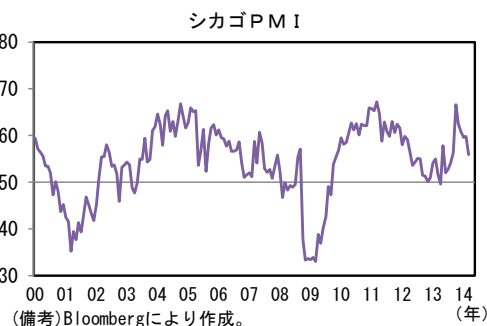
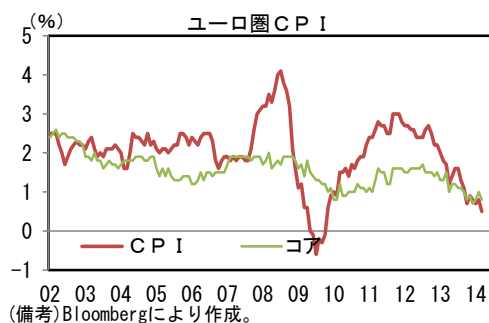
※は右上記載時刻における直近値。図中の点線は前日終値。

(出所) Bloomberg



【海外株式市場・経済指標他】 ～ECB：ゼロ回答？～

- ・ N Y ダウ平均株価は前日比+134.60ドルの16457.66ドルで取引終了。
- ・ 3月ユーロ圏HICPは前年比+0.5%と市場予想(+0.6%)を下回り、前月(+0.7%)から減速。エネルギー価格は下落率縮小(▲2.3→▲2.1%)も、食品・アルコール・タバコ(+1.0→+0.8%)の上昇率縮小が響き、コアも+0.8%と前月(+1.0%)から鈍化した。3月の鈍化が予想されたものであるとはいえ、0.5%という上昇率はさすがにECBの想定を下回ったとみられる。今週の理事会はゼロ回答がメインシナリオだが、直近、ECB高官がハト派寄りの発言を連発していることと併せて考えると利下げの可能性は幾分高まったと言える。
- ・ 3月シカゴPMIは55.9と横ばいを見込んでいた市場予想に反して前月(59.8)から悪化。
- ・ 3月ダラス連銀製造業景況指数は+4.9と前月(+0.3)から大幅改善。市場予想(+3.0)も上回った。生産(+10.8→+17.1)新規受注(+9.5→+14.7)が非常に強く、雇用(+9.9→+15.0)も伸びた。ISMベースでは55.8(前月53.4)と約4年ぶりの水準に到達。

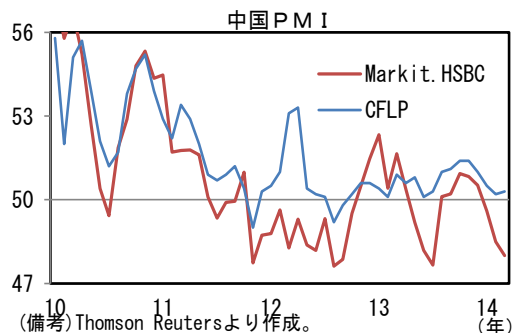
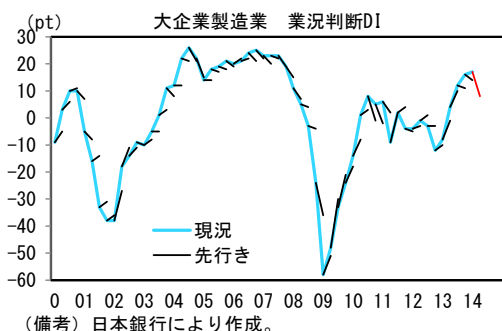


【外国為替相場・債券市場】～「6ヶ月」は封印、フラットニング一服～

- ・25日のG10通貨はJPYが最弱、次いでUSDの弱さも目立った。USD/JPYは欧米株堅調・米金利低下という金融相場的な色彩が強まるなかでリスク選好のJPY売りが目立った。他方、EUR/USDはユーロ圏HICPの予想下振れに逆張りで反応、一時1.38を回復した。1日日本時間でUSD/JPYは、日中経済指標に反応することなく一進一退。RBAは予想通り政策金利（+2.5%）の据置きを決定。声明文に主だった変更は無く、為替の判断も“remains high by historical standards”が踏襲された。
- ・米10年金利は▲0.3bpの2.718%。当初、上昇していた米金利は「経済や労働市場に依然として相当のたるみがある」「異例のコミットメントは当面（some time）必要」とのイエレン議長発言を受けて上昇を帳消しにした。今回は「6ヶ月」発言を封印したようだ。2年（▲0.30bp）、5年金利（▲0.31bp）も低下し、フラットニングは一服。欧州債市場は区々。独10年金利は小幅上昇（+1.8bp、1.566%）で引けた。

【国内株式市場・経済指標他】～短観下ヒゲも、一部業種は気を吐く～

- ・日経平均株価は前日比▲35.84円の14791.99円で取引終了。
- ・日銀短観（3月調査）では、大企業製造業の業況判断DI（+16→+17）が小幅改善も、先行き判断DIは予想（+13）を大幅に下振れて+8に落ち込んだ。非製造業も同様、現況（+24）に対して、先行きが+13と急激な悪化を見込んでいる。現況と先行きの変化幅は自動車：▲38、小売：▲29、宿泊・飲食サービス：▲17で大きく、消費者（最終需要）に近い業種ほど先行きを慎重にみていることが示された。反対に、はん用機械（+6）、造船・重機（+6）など、消費増税の影響が軽微な業種では更なる業況改善が見込まれている。国内の設備投資や海外需要が上向きつつあるのだろう。非常に心強い内容だ。
- ・3月Markit版PMIは48.0と速報値から0.1ptから下方改定（前月：48.5）。一方、3月中国PMI（CFLP）は50.3と予想（50.1）に反して前月（50.2）から改善。5ヶ月ぶりの改善で、新規輸出受注（48.2→50.1）の改善が目立った点が好印象。内需に期待がしにくいなか、海外経済主導の回復シナリオが描き易くなったことはポジティブ。



【注目点】～足もとと見られると～

- ・昨日のユーロ圏HICP公表後のEURの上昇は、さながらECBを挑発するような動きだったと言えよう。ドラギ総裁発言は「必要ならあらゆる措置を講ずる」と明言してきたが、市場はそれがリップサービスであることを見透かしたようだ。ECB高官によるトークダウン効果は既に賞味期限が切れてしまった印象を受ける。市場では「投機的なEURロングを仕掛けても、どうせECBは追加緩和に動かない。怖いものは何も無い」といった安心感が蔓延している。足もとのEUR高は“ECBが原因”と言っても過言ではないだろう。
- ・この点、JPYも今後は注意が必要だろう。黒田総裁の「必要なら躊躇なく調整」が海外短期筋を中心に意識されているとみられ、日銀に対する失望はQQE発動後にほとんど観測されていない。しかし、このまま為替の円安に弾みがつかなければ、夏場以降にCPIの伸び率が鈍化するのとは必至の情勢。その時「リップサービスはあっても、日銀は動かない」との見方が広がれば、投機的なJPY買いが流行する可能性はある。今後は、従来以上に市場が日銀の動向に影響を受けるだろう